毛利三代実録と毛利三代実録考証（毛利家文庫３公統240・同241）

01

記録 ①

毛利三代実録の編さんがはじまる

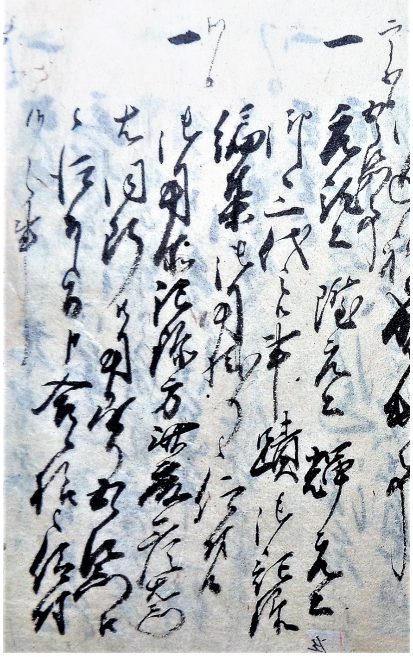
《毛利三代実録》

写真は、明治26年(1893)に完成した「毛利三代実録」（31冊）と「毛利三代実録考証」（124冊）です。前者は、毛利元就・隆元・輝元三代の事蹟を叙述したもので、後者はその叙述の典拠を収録しています。今日編さんされる自治体史でいえば「通史編」と「資料編」の関係です。

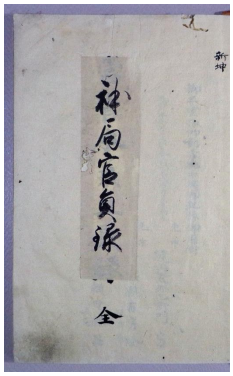
《実録編さんのはじまり》

文政6年(1823)2月5日、10代藩主毛利斉熙は、密用方の周布五郎左衛門と御用所記録方の斎藤彦右衛門に「元就公・隆元公・輝元公御三代之御事蹟御記録編集御用掛り」を命じ、三代実録の編さん事業がスタートしました。今年は、それから数えて200年になります。

右の写真は「密局日乗」という密用方の業務日誌の一部で、「五郎左衛門事」つまり周布五郎左衛門と御用所記録方の斎藤彦右衛門のことが記されています。



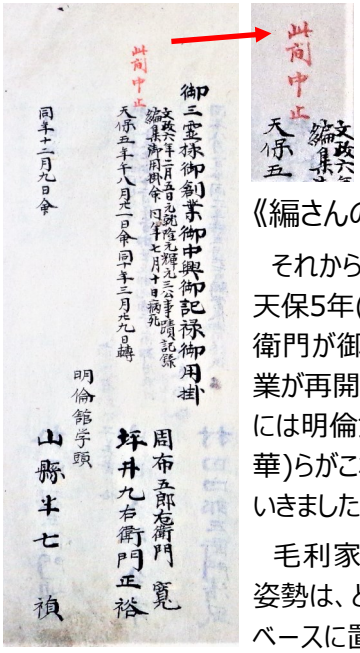
ところが、次頁の写真「秘局館員録」を見てください。この資料は、密用方の諸役に就いた役人の任免を記したもので、これによると担当の周布が半年後の7月に亡くなり、事業そのものが中止になったと記して



秘局官員録
（毛利家文庫10諸役31）

７代藩主重就が設置した密用方は、毛利家の由緒、歴史など藩主の密命を承けて、藩内の諸資料を中心に調査して成果をまとめました。

密用方が設置される以前の事業も含めて、御系譜、閥閲録、諸家譜録、大記録、三代実録、防長国郡誌の各編集担当者名が記録されています。



います。中止になった詳しい事情は、よくわかりません。

《編さんの再開》

それから10年余りの歳月を経た天保5年(1834)8月、坪井九右衛門が御用掛に任命されて、事業が再開しました。また同年12月には明倫館学頭の山縣半七(太華)らがこれに加わり、本格化していきました。

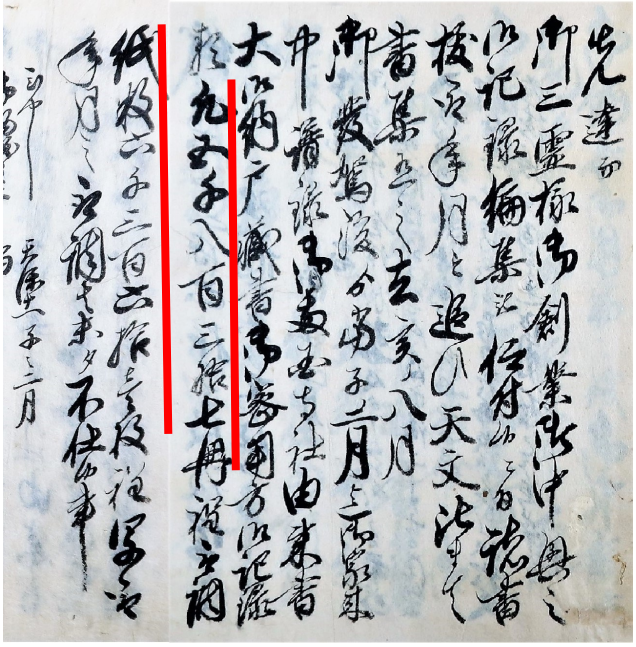
毛利家の歴史編さんに対する姿勢は、とにかく根拠となる資料をベースに置く、いわば「実証主義」です。毛利家に伝わる古文書（什書）や、史臣永田政純が編さんした「閥閲録」・家臣に提出させた「譜録」などから、毛利家当主の活動を示す文書を抽出し、また寺社や家中以外の家に伝わる文書なども含めて、三代の事蹟を著す根拠となる資料の調査を進めました。調査地域は防長に留まらず、安芸国の厳島社をはじめ中国筋、九州・四国などにも及びました。毛利家ゆかりの地へも調査に出向いて、可能な限り関係のある文書・記録を収集していきました。

《資料の収集・整理》

右の写真によると、天保11年(1840)2月のこととして、前年8月の「御発駕」（殿様が参勤で萩出発）以降、譜録・寺社由来や大納戸にある蔵書、密用方の記録類、合わせて5,837冊を取り調べて、紙数6,361枚に写し取ったことが記されています。文書や記録類を調べて、実録編さんに必要と考えられる書状や判物などを見つけ出して筆写する作業は、今日の歴史研究と何一つ変わらない基礎的かつ地道な作業です。

筆写した資料は、実録編さんに必要と考えられるものですが、「年月之取調者未タ不仕候事」と無年号の書状等の年代比定は完了していないとしています。無年号の文書の年代を推定する作業は、文書・記録や歴史に関する知識がないと大変です。年季が必要で、日々精進することで力量が身についていったと思われます。

御用掛の配下に「助筆」が5人程度置かれ、御用掛の指示のもと、必要な資料を筆写する役割を担っていました。それは、単なる筆写ではなく助筆自身が資料を精査し判断していたようです。助筆を経験したのちに、立身した者もいます。



「御三霊様御事跡御編集一事記録」（毛利家文庫9諸省160）

先達而
御三霊様御創業御中興之
御記録編集被仰付候ニ付、諸書
抜取、年月を追ひ、天文比まて
書集有之、去亥ノ八月
御発駕後ゟ当子ノ二月迄、御家来
中譜録・御両国寺社由来書・
大御納戸蔵書・御密用方御記録
類凡五千八百三拾七冊程取調、
紙数六千三百六拾壱枚程写取、
年月之取調者未タ不仕候事、
ひやし　天保十一子之二月

《編さん事業》

三代実録は、「三代」を元就・輝元・秀就として慶安4年(1651)までの編さんとしたり、隆元を入れて「四代実録」、つまり元就を別格と位置づけて「仰徳様(元就)　御三霊様御事蹟御編集」とするなど、紆余曲折を経ました。一時は中止になりかけましたが、明治3年(1870)の元就300回忌のさい、「半途ながら」（未完成ながら）御霊社へ奉納されました。

その後、明治9年から四代実録の精選が指示され、明治13年には標目を四代実録から三代実録に改め、「元就・隆元・輝元」の三代として作業した結果、明治26年に冒頭の写真「毛利三代実録」が完成したのです。